

郷土館だより

Vol. VI No.3

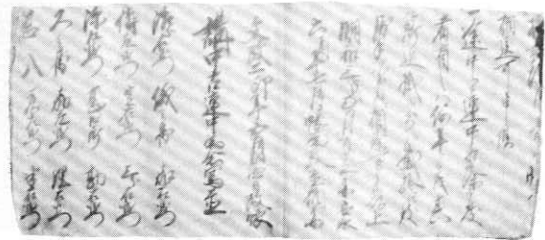
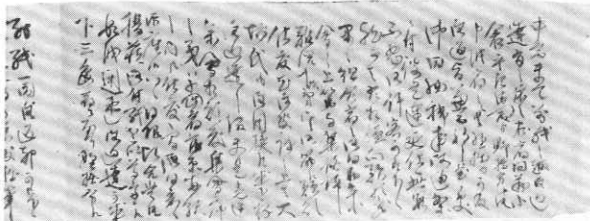
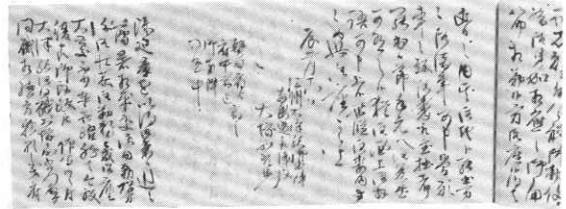
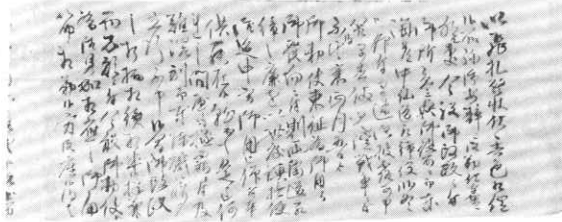
1984. 3. 15



官伎 (三四呂人形・野口三四郎作)

目次

幕末の本陣御用留から……………	1・2
川原ヶ谷の念仏講……………	3・4
59年度行事予定……………	5・6
講座報告……………	6・7



【解説】

之は慶応四年二月十八日江州大津宿本陣大塚喜右衛門が東海道筋各宿本陣宛に出した「大政奉還」という大改革に対する緊急対策の打合せ議の要請状である。

家康以来の徳川二七〇年の歴史は慶応三年十月十四日の大政奉還により崩壊した。この大政奉還は幕府側の打った大きな賭けで、武力討幕派が洛外正親町三条実愛の邸で討幕の密動を作っていたのを、うすうす知っていた幕府は先手を打って大政奉還を図り、其の後当然開かれる全国大名会議の議長に慶喜が任ぜられるよう目論んだが然し、討幕派は王政復古という名目で討幕の密動降下を同年十月十五日に受け、慶喜は逆に納地納官に迫いつめられた。続く鳥羽伏見の一戦で徳川の社稷は坂をころがり落ちる樽のように崩れる一方であった。

慶応四年二月十五日有栖川宮大総督の率いる官軍が進発東下した。錦の御旗を立て、トンヤレ節で東海道を下ってくる。各宿場は兵隊であふれ、江戸と京都のあいだの飛脚や交通は固く、さしとめられた。為に従来公卿、大名の宿泊を目的としていた各宿場の本陣は其の経営に致命的な打撃をうけた。如何にして新時代の将来に對應して行くか、旧幕府に対する恩顧と同時に新政府に対する熱い願望を求めて自分達の将来の運命に必死となつて、緊急対策会議を開いたに違いない。

然し彼等の努力もむなしく、歴史の流れは遂に明治三年本陣、脇本陣の名目は廃止され、事実上、本陣という特権は消滅してしまふのである。

(三島古文書講習会)

三島本陣文書整理

★トピックス★

幕末の本陣御用留から

三島古文書読習会が、テキストとして継続して
 読んでいる「本陣御用留」は、分量が多い上、平
 和時の御用書留は読んでいてもたいくつな内容が
 続く。難解な走り書きに、かなり忍耐を強いられ
 る学習である。

ところがこうした御用留でも、ある程度まとま
 った期間を読み進むうち、その面白さが次第に解
 るようになってくる。特に最近読んだ幕末の御用
 留では、東海道の一つの宿場の本陣家が日常の御
 用として書き留めた文面の裏側に、日本の社会の
 あわただしい動静が、読んでいる者にひしひしと
 伝わってくるのが判るからである。

今回は、こうした箇所の一つ、慶応四年の御用
 留について、三島古文書読習会の解説と解説を掲
 載してみた。じっくり味わって読んで頂きたい。

(杉村)

【解説】

（幕末に於ける樋口文書御用留の一節）

以飛札啓状仕候春色相催

候所弥御安靜ニ御勤仕奉賀候

然ル処今般御改政ニ付

御所参与御役所ニ而東

海道中仙道取締役旧冬

被仰付早速御披露可申

答早春伏見淀戦争ニ付

不得其意正月五日

御勅使東征為御用与

御発向ニ付則両街道取

締之廉を以此度鎮撫使

御道中方御用被仰付奉

供罷在候就而者是迄何

れ之問屋も極窮ニ付及

難渋別而本陣職ハ始メ

立行不申候間御改政

之折柄相続相成候様兼

而志願ニ付今般御勅使江

為御具加相成之御用

筋相勤候方御座候得者

近日之内其御地江罷出万

々御談事可申候間願

事之趣御書取置拙者

罷出候節手元へ御差出

可有之候猶御面上御拜

語可申上候此段御案内方

々如此御座候已上

辰二月十八日

江州大津駅御本陣

両街道取締役

大塚嘉右衛門

熱田宿方

府中宿迄

宿々

問屋中

添廻章を以得御意候道々

薄暑相成処御同勤様方

弥御壯恭御勤務被成御座

大慶不少奉喜躍然者今般

復古御改政被仰出候ニ付

大津駅御同職大塚嘉右衛門殿

同職相続方歎願之義府

御同□稀成御通繁

ニ付彼是遅延仕候此段

不惡御許容可被下候

就而者右相続向歎願之義

早々組合宿々御同勤参

会之上篤与集談致し

難渋之次第其御筋江歎願

仕度尤御決評之上者大

塚氏も御周旋被成下候様

御廻達之趣夫是急速

参会相願度集會席

之義ハ当宿蒲原両駅

之内江仕度候間御同意ニ

御座候ハバ日限頃合無御

腹藏御付紙を以尊慮被

仰越迅速御廻達可成

下三島宿ニ至り野拙方江

別紙一同御返却可被下候

先は右得御意度拙筆

愚文致呈晋候宜敷御

推覧之奉希候以上

由比宿

御本陣

問屋

由比郷右衛門

尚々東宿之付紙之御模様により
 奥津江尻ふ中御同勤中へ者拙子
 方早々御案内可申候已上

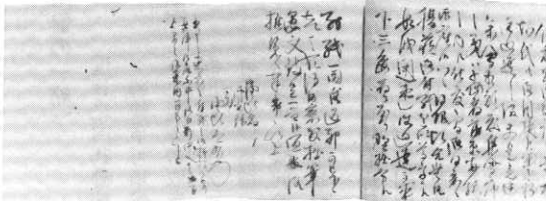
川原ヶ谷の念仏講

川原ヶ谷

三島市川原ヶ谷は、箱根西坂入り口の集落である。三嶋大社前の東海道を東に向かって進み、新町橋を渡ると川原ヶ谷に入る。江戸時代には、川原ヶ谷村として一村独立していて、君沢郡に属し、幕府領、相模国荻野山中藩領の支配を経ている。現在の川原ヶ谷は、通りに面して住宅が建て混んでいて、三島の街並の延長となっている。今はもう、昔の街道沿いの牧歌的な農村風景を偲ぶよすがも無い。

古い講帳

この川原ヶ谷に江戸時代が今も生きている。村の念仏講がそれだ。一冊の念仏講帳がある。帳面の冒頭に「明和三丙戌年 正月廿五日取立 安永六酉年 七月帳面改亦 文政二卯年 五月十四日帳面相改 古帳之六面並定書写」とあるから、現存の講帳の始まりは文政2年(1819)で、講の取立は明和3年正月(1766)ということが判る。

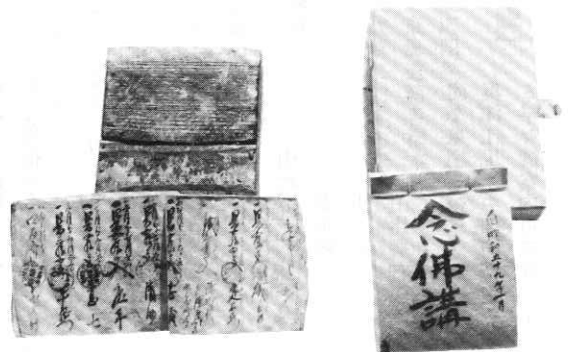


今回の念仏講調査は、この講帳の発見から始まった。発見と言っても、その存在を知らなかったのは調査者自身のことであって、川原ヶ谷地区では、この講帳を現在に至るまで永々と使用し続けてきていたわけである。まさに江戸時代が今も生きている証拠資料だった。川原ヶ谷在住の栗原曠一郎さんが、講のこと及び講帳の存在を知らせてくれた。さっそく駆けつけ拝見したのは、前述したような講帳だったのであるが、そこで、栗原

さんには一つの計画が有ることを聞かされた。それは、古い講帳を、今年から新しい帳面に代え、同時に講帳入れの箱も新しくするというものであった。古い講帳にはまだ余白も残っているし、地区の先祖達の歴史もこめられているが、このまま使用を続けると摩もうして破損してしまうので心配であるということが、第一の理由であった。同感だと思った。厚さ5センチ、四方20センチの講帳箱は、杉板材材であるが、200年近い使用による摩もうで痛々しい姿であった。講帳の方は、箱からの出し入れによる木口の摩もうが激しく、文中の1行目と末行は読めない状態となっていた。栗原さんは、古い帳面と箱を、念仏講の宝として後世に保存しようと言うのである。

講中における栗原家の役割は、代々重要な地位を占めてきた。その一つは掛銭の徴収である。毎月、輪番制で宿(当番)が回って来るのであるが、宿となった家は、講の時取立てた掛銭を栗原家に持参し、栗原家は講帳に記帳した上で印を押すことになっていた。現在、ここの念仏講の掛銭は、宿となった家だけが掛ける50円である。栗原さんは、今回掛銭の値上げについても提案しようと考えていた。余りにも現実離れした、安すぎる金額だったからだ。年間600円そこそこの積立では、31軒の講中の賄いの何ももの出来ないというわけである。栗原さんが帳面改めを考えた第二の理由は、この点にあった。

文政年間以来の古帳を見ると、掛銭値上げの歴史もわかって興味深い。この件についても、栗原家は指導的な役割りを果たしてきたようである。



念仏講の発起人

川原ヶ谷念仏講の始まりは、明和3年(1766)の正月であった。発起人は茂左エ門で、彼は安永2年5月に亡くなっている。創立当時のとり決めによれば、当初の基金として「一人宛六銅(台掛)」月々「一人三文宛」となっている。講は毎月15日の晩と定め、三文を当番の家に持ち寄ることとしている。講中から離れることは勝手であるが、その時は、たとえ何年間も積み立てた掛銭があっても、それは掛け捨てになることも決まっていた。当初の一連講中は、次のような講成員であった。

治郎左エ門 儀兵衛 嘉右エ門 伝左エ門
 定右エ門 三郎右エ門 源左エ門 甚四郎
 勘右エ門 久兵衛 嘉左エ門 理右エ門 甚八
 庄左エ門 半右エ門 多兵衛 勘左エ門□□
 彦右エ門 勘七 善右エ門 惣兵衛 安兵衛
 与七 利兵衛 弥左エ門 清兵衛 五右エ門
 三郎兵衛 弥七 五郎兵衛 治左エ門
 嘉右エ門 七兵衛 久七 蒲八 儀兵衛
 大津屋 次郎右エ門 さが一母 五郎左エ門
 金兵衛 伊左エ門 弥七同母 孫七

与惣右エ門 平右エ門 源七 十蔵 嘉右エ門 彦七(講帳には、以上50名が読めるが、木口破損部に6名ほどが記されていて、都合56名の講成員であったようだ。)

毎月の講日以外にも、往生人(死人)が出た年は、正五九の忌日又は五節句の祝儀日には、いかなる私用があってもかならず集り、寺がいかにか遠方であっても野辺送りをし、掛銭から三百文を出すように決めている。この遣いには餅固(モチカタメ)以下の子供を出してはならないともある。更に掛銭の用途としては「奉賀寄進等」には一切使わないことも約束であった。

川原ヶ谷の念仏講

正月16日、月1回の念仏講を見学した。当番の家に講連の老婦人方が集って来る。床の間に掛けられた先祖伝来の5本の掛軸(南無阿弥陀仏の名号、十三仏等)の前には、当番宅で用意した供物(団子、餅、菓子、菓物、水、茶、講帳)が飾られている。講連が揃った頃合いを見て、古老のリードで一斉に念仏が始められる。キンキンというカン高い鉦の音と共に、早いテンポで唱和が進んで行く。

古い講帳によれば、川原ヶ谷の念仏講は、死人が出た時の葬式組としての講と、月毎開かれる月次念仏とが混成して、現在まで続けられて来たこ

とがわかる。今は使っていないが、かつては百万遍念仏も行なわれていた。栗原家には大数珠が残っている。本来は浄土教系の念仏講であったものらしいが、現在は種々混成の祈禱集団と言える。

掛銭の変化

講帳から掛銭の変化を拾ってみた。前記したように当初は一人3文宛であった。その後、講中連名改めが有り、その時銭15文宛に変っているが、惜しいことには何年の改めかが不明である。

明治16年7月、それまでの文勘定が何銭何厘何毛と変り、この時4銭1厘5毛が掛銭であった。往生人に対しては、金15銭が支払われている。興味深いのは名前の書き込みである。明治20年を過ぎる頃より名前に苗字が書き加えられ始めている。明治40年代に入り、金15銭が月々の掛銭となる。ところが、明治40年から大正にかけて、月々4銭から5銭に値下りしている。おそらくこの頃、掛銭は、当番の家のみが月々納入する方式に変えたものと想像される。その後、大正14年に10銭となる。昭和23年、すなわち戦後になって、5月から1円となる。昭和25年10円となり、10円時代は43年まで続く。43年8月50円となり、昭和58年に12月までが50円時代となった。

栗原曠一郎氏が改帳した昭和59年度は、いよいよ100円時代となった歴史的な年でもあったわけである。(杉村)



59年度事業行事予定

今冬は、一口で申せば、“異常に寒かった”。日本全土に大寒波がいきなり、2月の末になってまで温暖な当地に雪を降らせた。そして、日中の気温が上昇しないため、近辺の山々はいつまでも、この雪を抱いたままです。

といっても、自然界（動植物）は鋭敏なもので、日毎明るさと陽の長さが増す光の中で、露のとうが芽吹き、植物達は春の仕度を着々と進めています。

さて、当郷土館では本年度執行予定事業の消化に追われつつも、来年度事業計画に対して、又、博物館の機能充実に向けてプランを推こうしています。

59年度行事予定は、下記のとおり計画していますが、まだ細部について未定のものもあります。館員一同、鋭意工夫努力し、皆様のご期待にこたえたいと思います。

○特別展

特別展会場は、2ヵ年継続事業で展示ケース改装工事を行なっているが、59年8月末に事業完了する。改装後、この展示場をより効率的に活用するため、本年度は企画展とテーマ展を開催します。ちなみに、特別展は館草創期において、年3～4回催しましたが、近年は秋季1度の開催です。どうぞ、大変明るく装い新たな展示場での特別展をご期待下さい。

(59年度 行事予定表)

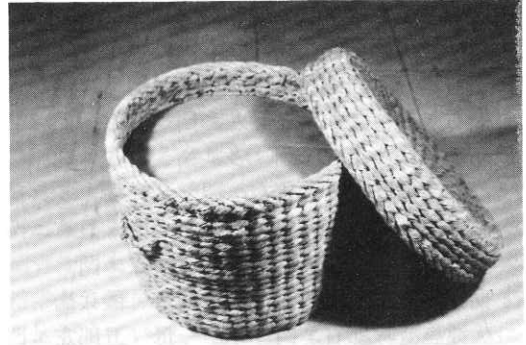
区 分	行 事 名	期 間	備 考
展 示	企画展「藁と生活」	59年11月～59年1月	特別展会場
	テーマ展「三島の文化財」	59年9月下旬	〃
体 験 講 座	「おかざり作り」	59年12月初旬(月曜日)	講習室(会議室)
	「草木染め」	60年3月中旬	〃
青少年健全育成事業	「縄文土器作り」	59年11月下旬～60年1月初旬	〃(中学生対象)
	「初午織り作り」	60年2月初旬	〃(小学生対象)
	「郷土史、文化財講座」	60年3月初旬	〃(中学生対象)
郷 土 学 習	「夏休み親子学習会」	59年7～8月	
歴 史 探 訪	「史跡探訪」「文化財めぐり」	59年10月	
刊 行 出 版 物	企画展図録	59年11月	1000部
	テーマ展図録	59年9月	〃
	郷土館だより		年3回
映 画 教 室	春休み映画教室	59年4月初旬	
	夏休み映画教室	59年7月下旬～8月初旬	

①企画展「藁と生活」

稲作農業と共に藁は、農具をはじめ生活用具として、日常生活と結びつき、多種多様に広く利用されてきました。

古くから伝承されてきたこの「藁と生活」の結びつきについて、展示を通し見直していただきたい。

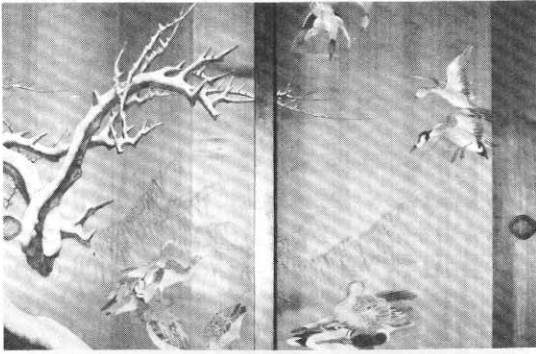
展示資料—藁製履物（藁沓、草鞋）敷物（ござ、むしろ）かぶりもの（笠、帽子）外とう物（みの）祭事用具（しめ縄）等



②テーマ展「三島の文化財」

歴史の長い当市には、貴重な文化遺産が数多く存在します。

今テーマ展では、“指定文化財をより多く集めて、公的博物館で一般公開したい”という気持を押え、新指定物件のPRや、新規物件の掘り起し等に重点をおきたいと思えます。文化財に対する理解と認識が深まる事を……



○青少年健全育成事業

縄文土器作り

用土作りから、焼成まで自分の手で縄文土器を作り、古代人の知恵や生活を探ってみようという体験学習です。

この講座の開催日は、12月、1月の土日曜日4日間、割と長い学習期間のため、他の学校の生徒同志の交流ができ、お互い学校の様子や、地域の話題など楽しくやっています。(市内6中学校あり、各校より5名の参加)

—住宅、人口が過密化し、各学区が昔に比べ小さくなり、おのずと生徒の行動半径も狭くなっているように思われるが—

三島市郷土館運営協議会 委員の委嘱

三島市郷土館運営協議委員の任期満了にともない、次の各氏が、昭和58年12月1日付で新委員に委嘱されました。任期は2年です。

委員長	伊達 主	中島88-1
副委員長	佐伯 清法	本町9-1
委員	井上 一雄	東本町2-10-3
〃	久保田和義	南本町13-34
〃	西岡 昭夫	沼津市下香貫牛伏
〃	斉藤 宏	函南町柏谷955-12
〃	関野とくゑ	芝本町5-17
〃	大原泰子	大宮町1-11-4
〃	鈴木 真夫	小山町竹之下1334-1
〃	秋津 亘	南本町17-14
〃	望月 一夫	光ヶ丘1-8-15
〃	滝口 光	長泉町杉原2
〃	牧野 鉦次	夏梅木2000-1

(以上13名)

新委員によりまず第1回目の運営協議会が、2月22日当館会議室で開催されました。各委員さんより、貴重なかつ活発なご意見がありました。

(梅田館長)

郷土館体験講座

複製三四呂人形づくり

11月24日、郷土館で、「野口三四郎三四呂人形展」にちなみ、複製三四呂人形づくりが行なわれました。三四呂人形保存会の方々が指導に当たりみやげもの屋でよく売られている「里子」を19名の市民が製作しました。素焼の型に石州和紙を張り彩色を施す。細かい技術がいり、たっぷり一日かかりました。

三四呂人形は、昭和12年に亡くなった野口三四郎氏の創作したもので、張り子の上に和紙を張り淡く彩色した素朴な人形です。技術が絶えた後、昭和31年、友人達の努力で複製を作るにあたり、素焼きの型を大量に作る事に成功しました。三四郎の人形とは一味違いますが、可愛い人形達は、みやげ物として市民に愛されています。(福田)



青少年健全育成事業「縄文土器作り体験講座」

私たちの郷土三島からも縄文時代の人々が使ったと思われる土器が多く発掘出土しています。これらの土器は縄目の模様があることから縄文式土器と呼ばれています。古代人が使用していた縄文土器をただながめるだけでなく、自分の手で作ってみようと市内の中学生28人が集まりました。延べ5日間にわたる作業の残りっぱに完成した土器は1階の展示場に飾られ、市民の皆様にも見ていただきました。(稲木)



郷土館体験講座 「おかざり作り」

稲作が始まって以来、長く藁は生活に欠かせぬものでした。おじいさんの時代まで、藁葺で藁が刻み込まれた土壁の家に住まい、むしろやござの上に坐り、藁ぶとんに寝ていました。草鞋を履き、雨を編笠と蓑でしのぐ。飯は藁籠で保温され、子供は藁の揺り籠で育ちます。しぼる道具は縄、袋は俵、藁灰は大切な肥料であり、焼きもの・染めものを美しく発色させます。日本人は、最も藁を利用した民族でした。

今私達の生活は、鉄・コンクリート・プラスチックに囲まれ、藁に触れる機会はずかしく正月飾りぐらいです。古より手作りされたお飾りを、12月11日、芹沢貫一氏の指導で、22名の市民が作り上げました。藁のよさを忘れないでいたいものです。(福田)



入館者報告 (S58. 4~59. 3)

学生 (小・中・高)	20847人
一般 (個人)	30561人
団体 (30名以上)	2981人 (55)
合計	54389人

■編集後記■

例年になく厳しい寒さが続いた冬も終り、ようやく春の陽差しが感じられるようになりました。東海の名庭園楽寿園の中に位置する好環境に恵まれ、郷土館には日本全国津々浦々からの来館者が多い。先日午後楽園で有名な岡山から二人の若い女性の入館者があった。「この庭はスバラシいですね。」お二人と話すうちについつい三島自慢になってしまう。三島には他に誇れるものがこんなにも多かったのかと我ながらあきれてしまう。大切な郷土を大事にしていきたいと思う。(稲木)

少年教室 「初午幟作り」講座

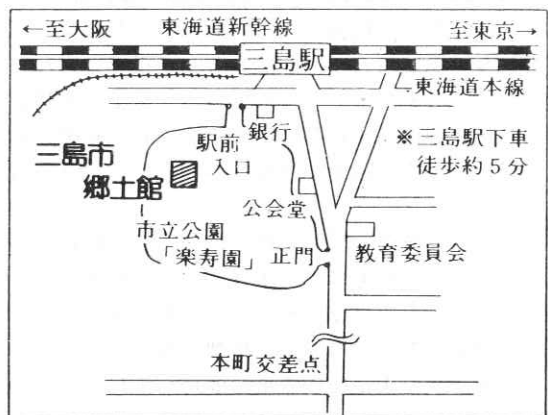
旧暦二月最初の午の日を「初午」と称して、必ず稲荷神のまつりが行われます。稲荷神の祠にはのぼりや棧俵にのせた赤飯を供えます。館ではこうした年中行事を正しく伝え、まつりの意味を学んでもらう為に小学六年生に初午ののぼりを作ってもらいました。2月4日(土)に開いた講座には37名の参加がありました。(稲木)



(完成したのぼりを持つ子供達)

利用案内

休館日 毎月第1月曜・12月27日～1月2日
開館時間 午前9時～午後4時30分
入場無料 (但し、楽寿園入園の際、有料)



郷土館だより No.18

昭和59年3月15日発行

(年3回発行)

編集 三島市郷土館
住所 〒411 三島市一番町19-3
TEL.0559-71-8228
発行 三島市教育委員会